

連載

市民起業家
という生き方

第31回

“元ひきこもり”の若者たちが
担う町の本屋

はるかぜ書店店長 石原直之さん

フリーライター
川口 和正

Photos by Yuli YAMAZAKI

「ひきこもり」「ニート」といわれる若者の就労支援が、近年、官民で取り組まれている。厚生労働省は共同合宿・生活型の「若者自立塾」をNPOなどへの委託事業として始めた。カウンセリングや職業相談・紹介などを無料で行う「ジョブカフェ」も、経済産業省が委託し各都道府県に設けている。

神奈川県横須賀市で、不登校やひきこもりの子ども・若者をサポートしているNPO法人「アンガージュマン・よこすか」も就労支援を進めている団体のひとつだ。今年5月、そのための店舗として「はるかぜ書店」という本屋を立ち上げた。5人のスタッフは全員、ひきこもり経験者。店の運営は彼らがすべて担い、独立採算制を敷いている。

「書店員の経験もない自分たちが果たしてやっていけるのか、プレッシャーもありました。町の本屋が年々、廃業に追い込まれるなど、この業界自体も厳しい。だけど、『ピンチが、逆にチャンスなんだ』と思って、みんな頑張ってるんですよ」。店長を務める石原直之さん（42）は、早口で歯切れよくこう語る。1つ質問すれば、明快な言葉で10以上返ってくる感じ。大学卒業後、13年間もひきこもっていたとはとても見えない、快活な人だ。

●雑誌・書籍1冊から無料で配達●

京急線・横須賀中央駅から坂を登ると、「上町商店街」に入る。肉屋や八百屋をはじめ、疊屋、三味線屋など老舗の店が並ぶ。その一角には、はるかぜ書店はある。店に着くと、石原さんがちょうど本の配達から帰ってきたところだった。赤のマウンテンバイクにまたがっている。「市内の方のご注文なら、雑誌でも書籍でも1冊から配達するのが、うちのウリのひとつなんです」。配達は無料サービスで、多いときには1日で10軒以上にの



「地域に愛される本屋をつくりたい」と語る石原さん。

はる。学校などの公共施設や美容院、医院を中心に、高齢者の個人宅などでも利用されている。経費を節約するために、可能な限り自転車でまわっているという。

アニメのキャラクターの本などを飾った正面ディスプレイに迎えられ、中へ入る。女性誌や健康雑誌が多い。クロスワードパズルの雑誌もかなりの数をそろえている。「病院が近くにあるので、通院される方が待ち時間の気分転換用などに買って下さればと思って、仕入れました」と石原さん。「子育て」「障害者福祉」「メンタルヘルス」といった福祉・教育の本も、巨大書店に匹敵するほどの充実ぶり。店名を譲り受けた前身の本屋が福祉関連書籍の品揃えに力を入れており、それを引き継いだ格好だ。絵本など子どもの本のコーナーには、テーブルと椅子も置いてある。幼い子を連れた母親が腰をかけ、ゆっくり本を選んでいた。通路の幅には余裕を持たせ、段差もない。ベビーカーでも通りやすいように、そして、お年寄りが安心して立ち寄れるようにと配慮されているのだ。

「『近くに本屋ができてよかった』と、お客様からもずいぶん声をかけていただきました。このあたりには新刊書店がなかったんです。坂が多いし、お年寄りが出かけるには大変だった。ここで店を開いた意義を感じています」

●NPOと行政、商店街が連携して開店●

店は、石原さんが週6日フルタイムで入り、残りの4人が交代で業務に就く。20代3人、30代1人と、いずれも若者ばかりだ。当初、石原さん以外のスタッフは就労研修としてボランティアで働



(上) 今年5月に開店したばかりの「はるかぜ書店」。「近所に本屋ができるよかったです」と地元の人たちからも好評だ。



(下)「ひきこもっていた若者たちの自立の場にしたい」という「アンガージュマン・よこすか」の小柳さん。

いていたが、8月からはバイト代が支給できるまで売上も上向いてきた。

はるかぜ書店設立を企画した「アンガージュマン・よこすか」の代表・小柳良さん（55）は、「ここは、ひきこもりの若者たちのための作業所という性格ではありません。普通の町の本屋をめざしてます」と話す。支援施設という前に、あくまでも1軒の店でありたい。経営を独立採算制にしたのも、スタッフがプロの職業人として自立してほしいからなのだ、と。

商店街の中に店をつくったのも、小柳さんの考えだった。「『人が人を癒す』っていうのかな。町の中に風通しのよいスペースをつくって、地元の人たちに立ち寄ってもらう。ひきこもっていた子たちが、商売を通して、人とコミュニケーションや社会との関わり方を学んでくれればと思ったんです」

小柳さんたちは、「ひきこもりの若者の自立のために、空き店舗を利用して本屋を開きたい」と、商店街の人たちに相談した。「地元の活性化になるし、社会貢献もできる」と、みな快く受け入れてくれた。空き店舗は、商店街の振興組合が借り

上げる形となった。県からは「ボランタリー基金協働事業」として位置づけられ、助成金を得た。石原さんたちも開店にあたり、書店員としての知識と技術を身につけるため、半年ほど書店での研修に勤しんだ。そして、今年の5月13日、オープンにこぎつけた。

●13年間のひきこもりから脱け出る●

「まさか、自分が本屋の店長になるとは、想像もしませんでした」と石原さんは笑う。「ひきこもっていたときは、『仕事なんて、もう一生できないだろう。親が死んだら自分は野たれ死ぬしかない』と思いつめてましたから」。13年間の「ひきこもり生活」は長く、苦しいものだったと振り返る。

「ネアカ」「ネクラ」といった言葉が流行していた80年代前半。大学入学後、彼はそんな風潮に違和感を覚えながらも、「ネクラなヤツと嫌われないよう」、明るく楽しげにふるまつた。が同時に、そういう自分が嫌でもあった。卒業を前にしても、就職する気持ちにはなれなかったという。「友だちはどんどん進路が決まっていくし、焦りました。でも、何事にも自信が持てない。会社に入っても、



(上) 店内には雑誌のほか、福祉・教育関係の本が数多く並ぶ。
(左下・右下) 革・布製品など地元の福祉作業所のグッズも扱う。

これじゃあ、すぐに辞めちゃうんだろうなと思って、チャレンジする気になれなかつたんです」

友人との連絡を断ち、家に閉じこもりがちになった。自室で朝まで酒を飲み、テレビを見て寝る昼夜逆転の生活。気分がいいときは自宅近くの図書館で哲学や心理学の本を読み、「僕のような人生でもいいんだ」と思い込もうとした。自分を見つめ直し、自分を変えようと、自分史を書いたこともある。だが、孤独で寂しく、不安な気持ちはついてまわった。

そして、転機が訪れる。オンラインゲームにはまっていた頃、そこで知り合った女性を好きになった。どんな人なのか、もっと知りたい。自分のことも知ってほしい。ネットを通じて告白した。「僕は家でずっとひきこもっています」——そう告げると、女性からはあっさりとふられた。涙を流すほど悲しかった。しかし反面、気持ちは楽になっていた。「相手に伝えたことで、『僕はひきこもりなんだ』と初めて自分を受け入れられたんです。ひとりのままじゃ、どうしようもできない。誰かの助けを借りて、この状態から脱したいと思った」。以来、彼は精力的に動き出した。手話や

ドラム、パントマイムなどの講座に通い、ハローワークに出かけて就職先を探した。そんなとき、保健所を通じて出会ったのが、小柳さんたち「アンガージュマン・よこすか」の活動だった。フリースペースや就労研修に参加していくうち、「はるかぜ書店の店長になったら」と勧められる。

「初めて石原君に会ったとき、『ほんとに、よくしゃべるヤツだなあ』と思った(笑)。人と関わることを怖がってなかつたし、積極的にコミュニケーションをとろうとしていた。『こいつなら大丈夫だ』と思いました」と小柳



(左) 配達は主に自転車で。店のブログには配達など一日の出来事を石原さんが綴る。(右) 店は老舗の商店街の一角にある。地域の活性化に期待も大きい。

さん。横で石原さんが笑ってうなづく。「まあ、僕はもともと、おしゃべりなんんですけどね(笑)。ついつい考えすぎて、心配性なところもあった。でも、『本屋のおやじになるのも悪くないかな』とふと感じて。思い切って、飛び込んでみたんです」

●地域に愛される町の本屋をめざして●

開店して約5ヵ月。仕事にもだいぶ慣れてきた。「店を始めてから、スタッフのみなさんは生き生きして明るくなりました。ほんとうによく働いてくれています。ミーティングのときも、改善すべきことを提案してくれる。店長としてはやりやすいし、とてもありがたく思っています」。客への丁寧な対応ぶりなど、その姿は随所にうかがえる。

商店街からも頼りにされている。「灯籠夜市」というお祭りでは、市民から灯籠の絵を募集する受付窓口になった。組合の役員にとも勧められている。後継者不足に悩む商店街にとって、若い力は何よりも不可欠なのだ。

とはいえ、店の経営は「これから」の部分もある。売上を増やすには店売りだけでは十分ではない。「福祉・教育の本に強い」というカラーを活かして、行政や学校、病院などへの外商にも力を入れていく。団塊の世代の老後を見据えた店づくりも考えている。個人宅へのチラシのポスティングなど、日常的な宣伝も続けていくつもりだ。

石原さんは「地域の人たちに愛される本屋をめざしたい」という。「『ちょっと暑いから、はるかぜで涼んでいこうか』『ちょっと疲れたから…』という感じで、気軽に来ていただける店になりた

い。本の値段はどこの店でも同じですけど、『どうせ買うなら、気持ちよく接客してくれるはるかぜで買おう』と思ってもらえる店をつくりたいんです」

実際、お年寄りから「インターネットで調べてほしい」と頼まれれば、必要なページを印刷して渡すこともあるという。商売に直接つながるものではない。しかし、普通の町の本屋ではできないサービスを通して、地元の人たちの暮らしに根づこうとしているのだ。

「地域に愛される本屋」——それは、石原さんをはじめスタッフの若者たちが、人とのつながりを豊かにし、「やればできる」と自信を取り戻す場になることでもある。かつては「失敗を恐れて何もできなかった」という石原さん。でも、今は違う。「『失敗してもいいじゃないか。もう一度やればいい。自分の力で取り返せるはずだ』と思えるんです」

スタートしたばかりの“再生”的道。彼は今、それを心底楽しみながら、歩んでいる。

〈はるかぜ書店〉

所在地／神奈川県横須賀市上町2-46

店長／石原直之

スタッフ／5名 創業／2006年5月

営業時間／月～土曜日：午前9時～午後7時、日曜定休

連絡先／TEL&FAX 046-804-7883

URL <http://blog.livedoor.jp/harukaze55/>

〈NPO 法人アンガージュマン・よこすか〉

所在地／神奈川県横須賀市上町2-4

代表／小柳 良

連絡先／TEL&FAX 046-801-7881

URL <http://engagement.angelicssmile.com/>